

フィリピンレイテ島における地すべり災害調査の報告

静岡徳洲会病院外科 河内 順

I 背景

平成18年2月17日 フィリピンレイテ島の南部のギンサンゴン村付近で大規模な地すべり災害が発生しました。レイテ島とは太平洋戦争激戦の地で、となり島のセブは観光で有名ですがこちらは唯一の名所がマッカーサーの銅像（I shall return って奴です）という、のどかで穏やかな島です。行方不明者が1000人を超えるとの報にTMA T（Tokushukai medical assistance team）は先遣隊の派遣を決定、我がSSAに声がかかり不肖河内が参加する事になりました。現地の関係機関との調整にやや手間取りましたが2月20日成田を出発しました。

II 現地へ

2月21日、マニラを米海兵隊の小型飛行機にて出発、1時間半かけてレイテ島北部の、タクロバン空港に着陸しました。途中、被災地の上空を通過していきました。標高800mの山の一部が尾根から崩れているのが見えました。タクロバン空港からはまた米海兵隊のヘリコプターに乗せてもらい、被災地に到着しました。



III 現地での調査

バスケット場が operation center となって、フィリピン赤十字が活動を取り仕切っており、ここで状況の説明を受けました。行方不明者は約1000名、発見された遺体は85体、これに対し、入院している生存者（怪我人）は通算でわずか21名という事が判明しました。殆どの方は逃げるまもなく、土砂に埋まったのでしょうか。また2000人の避難者が近くの学校などで生活していましたがこれらは家がなくなった方は少なく、二次災害を防ぐために一時的に避難している住民が殆ど、とのことでした。

その後被災地へ車で向かいました。上空から見たとおり、山が尾根から崩れ、ふもとは7 mの土砂が埋まり、建物はおろか電柱の1本も見えず、まさに、1つの村が跡形もなく消滅していました。生活のにおいがまったくしないため、ここに村があったことを実感する事は難しく、もともと何もない工事現場だといわれれば納得したでしょう。被災地では台湾、オーストラリアなどのレスキュー隊、アメリカ海兵隊、フィリピン陸軍などが活動していましたが、日の丸を見る事はできませんでした。私の後ろには家族を失った中年の男性がいましたが、出稼ぎから戻り故郷を見るその呆然とした顔を忘れる事はできません。

その後現地の怪我の一時救護所となっていた保健所を見学しましたが怪我人はいませんでした。また入院患者の殆どがいる現地の50床の病院も視察に行きましたが被災者は16人でいずれも軽症で、混乱が生じている様子もありませんでした。



IV 現地での判断

さて、先遣隊の一番の仕事は視察し、今後の本隊の派遣をどうするか決める事です。今回は災害の特徴として非常に限局していた事、現地はインフラも含め生活に混乱をきたすような状況ではない事、救急医療の対象となる怪我人が殆どいない事、現地の病院も比較的余裕がありそうであった事から、本隊の派遣は行わず、持参した医薬品の提供のみを行いました。

V 帰国

往路はヘリで来たところを帰りは車で5時間かけて、タクロバン空港にたどり着きました。ここから民間機でマニラに飛び、1泊してから成田に帰ってきました。軍のクーデター計画が発覚し、マニラに非常事態宣言が出たのはその翌日でした。

VI まとめ

災害は突然やってくるものです。外来や手術のキャンセルや変更などで迷惑をかける患者様、また自分が不在の間仕事を肩代わりしてもらったスタッフに迷惑をかけることとなりますが、感謝しつつ、割り切らないといけない面があるのも事実です。また、現地が必要としているニーズとチームとしてできる事が一致すればよいのですが、なかなかそうはいきません。特にわれわれのような民間の、予算も装備も十分でない団体が、圧倒的な災害を前にしてできる事は限りがあります。一口に災害援助といっても、救急医療、精神的ケア、衛生、復興支援、など多岐にわたり、また医療の形態も、診療所を開く、mobile clinicとして乗り込む、現地の病院などの傘下に入る、などの選択肢があります。今回は残念ながら我々のもっている能力を発揮できる場はなく、先遣隊の派遣のみで活動を終了しましたが、次回の災害に備えて、物心両面の準備を怠らないようにしなければいけないと感じた次第です。

